常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ　seasonⅡ
令和　４年　３月 24 日(木)
その３

◇ 学校文集「ひがし」　第 48 集 発刊に寄せて

学校文集「ひがしの子」　第四八集の発刊にあたって

校長　近藤

学校文集「ひがしの子」は、本巻で四十八集の発刊となる。初刊の発刊は昭和四十九年度。つまり本文集は、昭和から平成を跨いで令和と、三元号を歩んできた深い歴史がある。節目となる五十年を前に、これまでの歴史を紐解いてみたい。

❶S49 年(初刊)　❷S57 年(9 集)
❸S59 年(11 集)　❹H6 年(21 集)

❺H13 年(28 集)　❻H14 年(29 集)
❼R 元年(46 集)　❽R2 年(47 集)

昭和四九年度発刊の初刊から一貫して変わらない冊子名「ひがしの子」。けれども、冊子の内容は幾度かの変遷を辿る。半世紀に渡って受け継がれた本冊子「ひがしの子」の意図が、初刊発行時の第十六代岩瀬元校長の巻頭言からくみ取れる。

山あいの静かな暮らしのなかでおきる身近なでき事を、子どもたちはどう受け止めているのだろうか。純真で明るい六十人の目に受け止めたものは、きっと新鮮で感動と感慨をふくんだものに違いない。（中略）　この詩集は、子どもの心の揺ゆれ動きが書かれ、子どものみたこと考えたことなど、端的に子どもを知ることができる。（中略）　子供は本来詩的表現力をそなえている。うたわれた言葉は素朴な感覚・純真さゆえに輝き、その韻律はおのずから詩の形をなすものである。詩を見て「こんな詩が書きたい」という気持ちをおこさせることができれば幸いである。本詩集は拙く背伸びしたところもあるが、詩の世界に、自由な感動の世界に、一人ひとりの子がおもむくままに自由にうたい、伸び伸びと彫った版画集でもある。六十の子らが、これからも人の心・美しさを精一杯うたい続けることを願って、序にかえます。　岩瀬　元

現在でこそ学校文集「ひがしの子」であるが、出発当初の❶「ひがしの子」は、【版画詩集（写真最下段）】として、その歩みを始めたのである。さらに、昭和五十七年発刊の❷第十一集からは、タイトルに添えられた肩書が「詩集」が「作品集」へと変わる。この変更の意図も第十一集の校長巻頭言で綴られている。

緑の山々に囲まれた生活の中で、学んだ一年間の思い出を残したい。今までの版画と詩だけでなく、思い出や感想文、学習のまとめ、日記の一部まで載せたい。（後略）

第十八代校長　加藤義夫

そして二年後、「ひがしの子」の肩書は二十代野村鉦吉校長の思いにより❸「学校文集」と姿を変え、❽現在に至るのだ。

学校文集「ひがしの子」ができあがって、うれしさ一ぱいである。四十九人の一人ひとりが大きく伸びてくれたなあという実感が込み上げてくる。（中略）この文集は、だれのためのものでもない、これを書いた一人ひとりのものだ。この文集が本当に光り輝く一里塚となるのは、これから立派な人になることをおいてない。がんばろう。

野村鉦吉

肩書以外の変化もある。初刊が1cmの厚みであったのに対し、校舎の移転と学区再編により児童数が増えた平成六年度❹には、三倍厚となった。他には冊子サイズ。❺平成十三年度までのB5版を最後に、❻平成十四年度からはA4版へと姿を変えた。加えて、製版技術の向上とともに❼カラーページも付すようになり、紙質も変わった。

さらに、カラー印刷が学校で手軽にできるようになった昨年度からは、❽ファイル方式に変更している。製本業者任せであった印刷や帳合、穴開け、とじ込み、表紙づくりと貼付などを、全て職員が対応した。手間と時間は必要ではあったが、手作り感は発刊当初に近いものとなった。労を惜しまず文集づくりに携わってくれる職員には、感謝しかない。

そして、本文集における最良の変更について触れなければならない。変更というより、一旦、変更したものを元に戻したと言った方がよかろう。

昨年度、よかれと考え、変更したのが❽表紙の写真。確かに見た目にはいい。けれども、どこにでもある学校文集と何ら変わらない。常磐東らしさが消えてしまっている。足りないものは一目瞭然。初刊から継続されてきた児童の版画絵である。何より版画絵は、「ひがしの子」の出発点でもある。「ひがしの子」の顔である版画絵復活の理由はここにあるのだ。

こうして様々な形で変遷と進化を重ねてきた「ひがしの子」であるが、発刊時の「版画詩集」に込めた子どもへの願い、「作品集」に織り込まれた教師の思いは、「学校文集」と姿を変えた今も変わらない。それは、発刊当時から数十年を経ても変わらぬ「豊かな緑」「清流青木川」「地域で子どもたちを見守り、育てる地域性」といった常磐東に根付く環境や背景、無形の気質や支援によるところが大きい。そして教師も、子供と同様に常磐東の地で無形の力を習得し、受け継いで、自らの心を醸成するのだ。だからこそ、四十八年もの長きにわたって続いていると言えよう。

そして、五十年前も、今も変わらぬもの。それは、岩瀬校長が語られた「恵まれた環境のもとで健やかに育つ子供たちから表出された言葉の輝き」である。学び舎を巣立った先人が積み重ね、いくつもの一里塚を築いてきたように、それぞれの作文の純粋で素朴な韻律、手書きの温かな文字、文章を通した無形の輝きこそ、常磐東の未来を照らす光なのである。